

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 30 日現在

機関番号：12603

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2011～2012

課題番号：23810006

研究課題名（和文） アフリカ農村におけるミクロな平和構築実践の動態

研究課題名（英文） A Study on the change of Peace Building Strategies on Micro level in Rural Africa

研究代表者 村尾 るみこ (MURAO RUMIKO)

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所 ・ 研究員

研究者番号：10467425

研究成果の概要（和文）：アフリカにおける「下からの」平和構築の動態から、「上からの」平和構築の課題克服の方途を探った。特に、農作物販売に関する戦略とマクロな政治経済との関係を分析した。その結果、調査地域であるザンビア国境地帯では、植民地期からの経済構造に南アフリカ経済が浸透するなかで、地域住民による新しいトランスナショナルな経済活動が構築されていることが明らかとなった。それはアフリカ農民の高い移動性が活用され、同時に農村での生計をも維持していた。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to examine the change of peace building strategies on micro level in rural Africa by focusing on small-scale farmers' cash earning activities and political and economical change on macro level. In the border area of western Zambia where I researched, the local people have constructed the new strategies of economic activities under influence of South African Economy. To achieve this, they utilized high mobile social activities.

### 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2011 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2012 年度	300,000	90,000	390,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：地域研究

科研費の分科・細目：地域研究

キーワード：(1)平和構築 (2)アフリカ農村 (3)アンゴラ移住民 (4)アフリカ地域研究 (5)自主的定着難民 (6)生態人類学 (7)ザンビア (8)紛争の長期化

#### 1. 研究開始当初の背景

アフリカの紛争後社会を対象とした平和構築分野では、農村に自発的に住んでいる紛争避難民を、外部からの援助等に頼らず社会経済的に自立して生計を営む「成功例」と捉え、難民キャンプ等に住む難民の自立

支援策へ応用しようとしている (Glooba-Mutebi 2002, Poltzer 2007 など)。しかし彼らの日常的な生計活動そのものの歴史的变化については検討の余地が残されていた。

#### 2. 研究の目的

本研究では、アフリカでもっとも紛争が長期化したアンゴラからの避難民を取り上げ、紛争後の当該国の国境地帯における下からの平和構築の実態を解明することを目指した。そのため、アンゴラ紛争が終結した後、人とモノの流れの活発化する隣国ザンビアのアンゴラ出自集団の生計活動の現状について明らかにすることを目的とした。

### 3. 研究の方法

主に、(1) ザンビアでアンゴラ出自集団の生計活動に関する現地調査、(2) 他のアフリカ地域での紛争避難民の生計活動に関する比較調査、(3) (1)・(2)を総合した上で現地関連機関への迅速な成果の還元およびその他の媒体を通じた幅広い層への情報公開をおこなった。

### 4. 研究成果

アンゴラ出自集団の移動と生業変化に関する資料の分析をすすめ、庇護国での生活が長期化した農村に住む難民が実践的に構築する生計維持をアフリカ農民の視点から論考した論文を執筆した。そのほか、国内外のシンポジウム・学会等で発表した。

調査研究で明らかとなったのは以下の点である。

(1) ザンビアでアンゴラ出自集団の生計活動に関する現地調査では、調査を実施した西部州の公設市場や村での小規模商店にて南アフリカ資本の商品の流入が顕著となっていることが明らかとなった。また、近年高成長を遂げる国家経済の波及を受け、アンゴラ出自集団が従来の移動性の高さを活用する形で広域かつ持続的に活発な経済活動を展開していた。特に、都市間で牛肉や魚、主食であるトウモロコシ粉の卸売業や小売業をおこなうなど、広域な経済活動を担うのは主に男性であった。一方で、より小規模な範囲では、移動性が高く安定的な現金収入源の少ない女性がそうした男性の経済活動による現金収入を元手に村内での小売業を活発化させ、またやがて村近郊の公設市場での農産物販売を活発に実施することで、西部州内外と同州農村での成功的な経済活動を展開していた。

(2) 他のアフリカ地域での紛争避難民の生計活動に関する比較調査では、イギリスのオックスフォード大学難民研究センターおよびケニアの首都ナイロビの関連機関にて各種情報資料を収集し分析をおこなった。この結果、南部アフリカにおける紛争後社会の特徴と東及び中部アフリカのそれとを比較した場合、南部アフリカが長期化した紛争による影響によって植民地期の政治経

済構造をより色濃く残すという特徴をもつことについて、土地制度や租税制度、農作物流通の詳細から明らかとなった。特にザンビア・アンゴラ国境の土地制度は、植民地分割の時代当時、アンゴラを統治していたポルトガルおよびザンビアを統治していたイギリス間で明確な領土が設定されると、ザンビア側ではイギリス植民地政府によって強固で厳格な租税徴収がおこなわれた。これによって、ザンビアでは伝統的な政治組織を通じた農村社会の統制が定着した。これが今日のザンビアの土地制度のなかでも依然のこされているため、アンゴラ出自集団の自然資源利用に制約を受け続けている。一方、アンゴラでは土地制度や租税徴収がおこなわれたものの、その後独立解放闘争と内戦が続き、実質植民地期の制度や体制が崩壊したまま無秩序な状態となっている。これが今日の政治経済変動のなか、アンゴラ出自集団による西部州内外での広域な経済活動の展開を推し進める背景となっており、国境地帯での地域住民の生計を特徴づける基盤ともなっていることが明らかとなった。

(3) (1)・(2)を総合した上で現地関連機関への迅速な成果の還元およびその他の媒体を通じた幅広い層への情報公開については、国内外の学術誌およびシンポジウム、学会で公開したほか、現地の国連諸機関や政府、NGOを訪問して会合を実施し、最新の情報について意見交換をおこなった。これにより、国内外でいまだ研究蓄積の薄い農村に住む難民の生計維持を具体的事例から提示し、その長期的変化の諸相について「下からの」平和構築へ資するものとして成果を公開した。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

① MURAO RUMIKO “Land use of Angolan Immigrants in Western Zambia: Rethinking the Autonomy of Self-settled Refugees for Coexistence in Host Country. “ *MILA* (A Journal of Institute of African Studies, University of Nairobi). 2013, 採録決定済、査読あり

② 村尾るみこ「未来を選ぶ一岐路に立つアフリカ南部の農民たち」『フィールドプラス』7. pp. 20-21. 2012, 査読なし

〔学会発表〕(計 12 件)

① MURAO RUMIKO “Successful Economy of Self-settled Refugees?: Mobility and Flexibility in Rural Zambia.” International Symposium “Mobility, Hibridity and the Way to Co-existence: Re-structuring of Daily Life in Rural and Urban African Societies”(The Japan Society for the Promotion of Science Nairobi Research Station, 8th and 9th February, 2013)

②村尾るみこ「アフリカ農民の創造性」京都大学アフリカ地域研究資料センターアフリカ地域研究会／京都大学出版助成記念講演 (於京都大学稲盛記念財団、2013 年 1 月 25 日)

③村尾るみこ「共生のなかの境界：ザンビア西部、アンゴラ移住民による土地利用の深層」東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所基幹研究「アフリカ文化研究に基づく多元的世界像の探求」公開シンポジウム「境界/ Borders in Africa」(於東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2012 年 12 月 15 日・16 日)

④村尾るみこ「自主的定着難民の食料生産—アフリカ南部アンゴラ移住民の 50 年から」地域研究コンソーシアム (JCAS) 次世代ワークショップ・プログラム「現代の紛争をめぐる地域間比較研究に向けて—アフリカとオセアニアの事例から考える」(於国立民族博物館、2012 年 12 月 9 日)

⑤村尾るみこ「私は難民定住地で失敗した：難民の生計調査での試行錯誤」合同研究会「フィールドワークの失敗学」東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究「社会開発分野におけるフィールドワークの技術的融合を目指して」日本文化人類学会課題研究懇談会「応答の人類学」共催 (於東京外国語大学本郷サテライト、2012 年 11 月 10 日)

⑥村尾るみこ「2 種類の 2 次林を開墾する—ザンビア西部州の焼畑農耕」第 22 回日本熱帯生態学会 (於横浜国立大学、2012 年 6 月 16 日・17 日)

⑦村尾るみこ「食料の安全保障問題からアフリカを考える」府中市生涯学習セミナー；東京外国語大学連携講座「アフリカのいまを考える」(於府中市生涯学習センター、2012 年 3 月 19 日)

⑧村尾るみこ「アフリカ都市文化の行方」東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所基幹研究「アフリカ文化研究に基づく多元的世界像の探求」公開国際シンポジウム・特別セッション「アフリカ都市文化の今」(於東京外国語大学、2011 年 12 月 17 日・18 日、コメンテータ)

⑨村尾るみこ「技術からみるキャッサバ栽培の多様性」東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 2011 年度第 2 回共同研究会 (基幹研究「アフリカ文化研究に基づく多元的世界像の探求」共催) (於東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2011 年 12 月 3 日)

⑩MURAO RUMIKO “The High Mobile People and National Resource Use in Rural Zambia: Toward an Understanding of Migrants and Refugees by Diverse Actors”. International Symposium, “Approaches and Methodologies of Field Research in Africa” (The Japan Society for the Promotion of Science Nairobi Research Station, 1st and 2nd Sep. 2011)

⑪村尾るみこ「長期化した紛争によるザンビア農村社会への影響：アンゴラ移住民のウッドランド耕作を中心に」日本文化人類学会 (於法政大学、2011 年 6 月 16 日・17 日)

⑫村尾るみこ「ザンビア西部におけるアンゴラ移住民の『帰還』と『定着』」日本アフリカ学会第 48 回学術大会 (於弘前大学、2011 年 5 月 21 日・22 日)

〔図書〕(計 4 件)

①村尾るみこ. 印刷中 (2013 年 12 月)「アフリカ農民から難民を考える」内藤直樹・山北輝裕編『包摂と排除の人類学—難民・開発・福祉』昭和堂 pp. 102-120

②村尾るみこ (2012)『ホストと調和して生きる—アフリカの自主的定着難民のケース』

イ利用』羽瀨一代・内藤直樹・岩佐光宏編『メディアのフィールドワーク』北樹出版. pp. 172-173.

③村尾るみこ「キャッサバ」「緊急食糧援助」「飢饉」(2012) 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科、『持続型生存基盤論グロッサリー』京都大学東南アジア研究所、グローバルCOEプログラム. pp32, pp35.

④村尾るみこ(2012)『創造するアフリカ農民』昭和堂. 単著、総ページ数 368

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

村尾 るみこ (MURAO RUMIKO)

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化  
研究所 ・ 研究員

研究者番号：10467425